

BOOK REVIEW

『老人・家族・住まい』

在塚^{ありつか} 礼子著

ここに紹介する『老人・家族・住まい』は、著者が一九七一年に高齢者の住まいの研究を始めてから、二〇余年の軌跡をとりまとめたものである。当時は老年人口比率が七%を超えたばかりであり、

一九八一年の四次調査と一〇年間にわたって追跡調査を行っている。全体の結果は、「老化への対応」と「家族との住み方」を中心に経年的にまとめられている。

有吉佐和子の『恍惚の人』がベストセラーになった頃である。老人問題への認識が高まりつつあったが、まだ高齢化社会という捉え方はされていなかったという。高齢化社会という言葉は、ぶん以前から耳にしていたが、実際にはそう古いことではなく、その対策もまだ始まったばかりなのだということを改めて感じる。

農村調査に関わる者として興味深いのは、調査地は当時、農家も混在していた郊外住宅地であったが、農家に特徴的な住み方が確認できた点である。たとえば、親が歳をとると若い世代と部屋を交換して一階へ移る、といったライフスタイルにあわせた住み方は、農家や、元農家のみみられたという。著者は、このような住み手が機能を決めていく伝統住居の柔軟性を「やわらかな住まい」として評価している。農村をフィールドにしていると、一つの住宅内での部屋移動や交換を見聞きするが、それが農家や、元農家のみみられた、ということとは新鮮な発見であった。また、親にケアが必要になった

本書の研究の対象は、在宅で暮らす老人だけでなく、老人ホームの老人たちの生活、海外の老人の住まいにもおよんでいる。特に最初の調査地である東京郊外の老人については、六年後の一九七七年の二次調査、一九七九年の三次調

時に子供が同室寝するのは、農家や、元農家、あるいは娘と同居する場合にみられた行為であり、それ以外の場合はベルをとりつけるなど器具的な対応が多いという。農家の生活は都市化し、農家の住宅も都市住宅と変わらないので、住まいに対する家族の意識は都市とはまた異なっていることがわかる。農家だけでなく、元農家も同じような結果であったということは、行動様式は現在の暮らしだけでなく、過去の暮らし方をひきずっていくものであることも教えてくれる。文中から引用すると、

「制度やシステムが整っていてもいい住まいはできない、計画の条件が満たされていても、さらに、〈名状しがたい無形の質〉が必要である」とある。〈名状しがたい無形の質〉とは、J・D・ボグランドの表現だそうだが、農村の住まいにはまだそういう質が隠されているかもしれない。各章の構成は次のようになって

第一章 〈老後〉の座標・老後の住居、老人の生活圏、機能の抜けた集合体Ⅱ老人ホーム、家族との住みかた、地域での住みかた
第二章 老人のいる住まい・高齢化社会の住まいを考える、火災に安全な住まい

第三章 やわらかな住まい・高齢者対応の住宅計画、〈やわらかな住まい〉に向けて

第四章 家族の時間と空間・住まいの昭和史、韓国の家族と住居、ある住まいの記憶

ここ数年、高齢者の住まいが研究テーマとして取り組まれるようになったが、このようにじっくりと丹念に取り組んできた研究は少ない。時代の移り変わりに機敏に対応した研究も必要であるが、やはり時間をかけてもストックになる研究が重要であることを感じさせられる。

住まいの図書出版局 一九九二・八・一〇（定価二二〇〇円）

評者
(社) 農村生活総合研究センター
主任研究員 野崎 あけみ